

August 10, 1978

**Cable No. 1608, Ambassador Sato to the Foreign
Minister, 'Treaty of Peace and Friendship between
Japan and China Negotiations (2nd Ministerial
Meeting)'**

Citation:

"Cable No. 1608, Ambassador Sato to the Foreign Minister, 'Treaty of Peace and Friendship between Japan and China Negotiations (2nd Ministerial Meeting)'" , August 10, 1978, Wilson Center Digital Archive, 2010-367, Act on Access to Information Held by Administrative Organs. Also available at the Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan. Contributed by Yutaka Kanda and translated by Steven Mercado. <https://wilson-center-digital-archive.dvincitest.com/document/220025>

Summary:

Japanese and Chinese discuss the relationship between the two countries and express interest in a continued partnership.

Original Language:

Japanese

Contents:

Original Scan
Transcript - Japanese
Translation - English

限定配布

秘密指定解除
情報公開室

極秘

天政軍外儀官
典房
巨官官審審長長
少総人電在：儀
対文会厚 海

1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の主管変更その他については電信一般問合せ係 (TEL 2172) に連絡ありたい。

電信写

総番号 (TA) R057275 5644

主管

78年 月 10日 03時 30分 中 国 発

78年 08月 10日 05時 57分 本 省 着

アシア局

外務大臣殿 佐藤 大使 臨時代理大使 総領事 代理

日中平和友好条約交渉 (第2回大臣会談)

第1608号 極秘 大至急

(限定配布)

第2回会談は9日午後4時20分より午後5時20分まで (休けい15分) 行なわれたところ、その記録次のとおり。(出席者は第1回会談休けい後と同じ)

1. 冒頭コウ華部長より、貴大臣の午前中の発言に続き中国側の態度を表明したいとして次のように述べた。

(1) 平和友好条約のは権条項は、先ず中日双方をこう束する。中日双方は既には権を求めないことを宣言している。現在のみならず将来経済が発展しても然り。中国のこのような態度はアジア及び世界の人民に知れわたっている。条約にこのことを書き入れるのも、は権を求めぬ中国の決意の表われである。

(2) 午前中の外相閣下の発言中、東南アジア諸国の態度に言及があつたが、確かに東南アジア諸国はこの条約交渉に関心を寄せ、条約の締結を願っている。条約締結をかん迎するのはソ連社会帝国主義の現実のきよういがあるからであり、次に歴史的経緯より日本に疑念をいただいているからである。東南アジア諸国は中国と同じく帝国主義の侵略を受け損害をこうむっている。そのためソ連に対し警かい心もち、中国の

参企析調
参一旅移
二查
次地中東
東
参北一西
参北北保
参一二
参西東洋
西東
参一二ア
次総経国資漁
経国資
参
参政技一開
技
書国一二理
参条協規
参政経科
軍社專
参道内外
参一二

秘密指定解除
情報公開室

極秘

注意

1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の主管変更その他については電信一般問合せ係 (TEL 2172) に連絡ありたい。

電信写

反は権に理解をもっている。日本については率直に言えば日本軍国主義の再現に対し
てはやはり不安をもっている。そのため中国は、一再ならず日本の友人のみな様に反
は権条項を含む条約の締結は、日本に対する印象を改めるために有利であるといつて
きた。これは実際に則した言い方であるとともに、日本に対する友好的立場から申し
上げている。

(3) 貴大臣は日本国民の見方についても触れられた。閣下は共同声明発出以来反は
権は国民の中に定^着していると言われた。われわれは閣下のこの言い方は、反は権の
原則が広く日本国民によりよう護されていることを表わすと考える。われわれは共同
声明の基礎の上に条約を早期締結することは両国民の願望^と利益に合致すると考えて
いる。しかし日本の一部がこれに反対していることも知っている。世界中どこでも良
いこと、正しいことが一部の人に反対されるのは不思議ではない。しかしこれに反対す
るのはひとにぎりの人でしかない。正直にいつて彼らは、条約の締結にではなく中日
友好、国交正常化そのものに反対している。彼らは両国民の意思を代表していない。
もし日本の為政者がこれらの人を代表するなら国民多数の意思に反することとなる。
一にぎりの人にくつすることは多くの人をうら切ることとなる。

(4) 外相閣下が就任以来一かんして条約の締結に積極的態度をとつてきたことはよ
く知っている。閣下は午前中再び条約締結への情熱を表明された。中国側は閣下のこ
の努力を称さんする。サトウ・韓念リュウ間では既に14回の会談を行ない、一定の
進展を見せ、反は権については新しい案を出し、双方の意見は段々と接近している。
ここに私は外相閣下及び友人のみな様に、双方の会談を一挙に妥結にもつていくため
8月7日の日本側案文に原則的に同意する。すなわち反は権条項第1文を「この条

秘密指定解除
情報公開室

極秘

注 意

1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の主管変更その他については電信一般問合せ係 (TEL 2172) に連絡ありたい。

電 信 写

約は、第三国との関係に関する各締約国の立場に影響を及ぼすものではない。」との案文である。これは中国の条約締結のための今一度の努力の表われである。条文の具体的表現については、細かい問題点が残っているかも知れないが、これらは解決しにくい問題ではない。これらのし事は、サトウ・韓念リュウの間でやらせることとした。外相閣下の同意があれば外相閣下と一しよにサトウ・韓念リュウ会談の成こうをいのりたい。

2. コウ部長が所要によるとして10分間の休けいを提案越し、約15分の休けいの後、大臣より次のように述べた。

(1) 私は過去20数年間日中問題で一かんして行動をとつてきた、日中議員連盟が成立する前、日本の雑誌「中央公論」に日中提携すべしとの記事を載せた。米国に無条件に追随するのはアジアにおける日本の自立化を招くと述べた。これについては党親委にふせられ強い反対を受けた。はしなくも外務大臣就任の時、日中友好条約の締結は、私でなければえいきゆうにできないと感じた。国内における外務大臣としての一かんした行動はよく御存知のとおりである。就任以来各国に行き行動をしてきた。その間いかなる所でも中国のたすけとなり、反は権闘争によいように行動してきた。今回非常な無理をおして訪中を行なつた。もしこの時期に条約交渉が成こうしなければ日中関係は今後相当期間停滞し、ASEANの国々は日本及び中国と提携いし、平和とはん榮にこうけんすることはできなくなる。そういう理由から、今次訪中に当つては私の生がいと運命をかけて訪中した。日本の政治家として生命をかけて参つた。これは日本の政治家として貴国をあいし、より以上に日本をあいし、アジアをあいしかつ戦争の反省より出た私の願いである。私は先ほど貴大臣の発言が妥協の方向に

秘密指定解除
情報公開室

極秘

注意

1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の主管変更その他については電信一般問合せ係 (TEL 2172) に連絡ありたい。

電信写

大きく動いたことに深くおれいする。大臣閣下、韓念リュウ閣下が真に日本、中国、アジアの未来のために決断されたことを高く評価する。私は、もしこの条約が妥結するなら日本国民に対し、私の口から私の責任において、この妥結に至つたの

は、中国の友人、中国の人民が日本に対する友情を示し、真にアジアの平和のためにも決断したからであることを日本の友人に対して率直に伝えるつもりである。

ここに先ほどの大臣閣下の提案に賛意を表し、韓・サトウ間で案文のツメを^行なうことを希望する。

(2) なお貴大臣の見解につき簡単に付言したい。まず極めて率直にわが日本に対して率直な注意を友人としていただいたことを心からうれしく思う。ソ連のきょういについては、全く同意する。日本に対する東南アジアの疑念、不安、残念ながら、これもよく私の反省するところである。先般のASEAN外相会議でも特にこの点に留意してきた。今後も中国に対しても東南アジアに対しても、中国及び東南アジアのはん栄の中に日本の進路を求めていくことを誠意と実行により示していただきたい。日本軍国主義が再現しないことを今後の実行によつて示していきたい。

(3) 日本の中に一部の反対者がいることは事実である。しかし日本の世論調査で、無条件で条約を妥結させるというのは30%近くしかいない。残りの、いわばしん重派の人々は、日中友好がアジアの基礎であることはよく知つているが、これらの人々は日中条約の締結が真に両国の発展とアジアの平和のためなのか、それともソ連に対する中国の戦略の一かんに日本が引きずり込まれるかという点に不安をいだている。この友好条約の締結により、この不安は一そうされるであろう。両国が純すいに手をにぎりこれを^みた東南アジア諸国も純すいに足なみをそろえる時本当に反は権に対

R057275-04

秘密指定解除
情報公開室

極秘

注意

1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の主管変更その他については電信一般問合せ係 (TEL 2172) に連絡ありたい。

電信写

する闘いも有効なものとなると信ずる。反は権の戦いは現在の状況だけではなく、未来いごうにわたつて、それぞれの立場から反は権闘争は続けられるべきことを確信する。目の前のことにとらわれ、1国のみを相手にしていない。日中のこの条約はその中に名存実亡のものとなり、未来いごうのものとはならない。締結のあかつきには、日本にもいろいろの問題がたくさんある、そのためには貴中国の援助も必要である。しかし貴中国もいろいろの問題をかかえている、その場合私はいつでも中国を訪れ、また貴国よりも日本へお越し願ひ、すん分のあなどりを他国より許さぬよう協力し対処する所存である。

3. ついで大臣より、サトウ・韓念リュウ会談において双方が努力されることを願う旨発言があり、大使より時間については明日何時でも都合のよい時にしたいと述べ、コウ部長はこれを了承した。

4. 更に大使より、本件は極めて重大なことであるので、サトウ・韓会談で案文を合意するまで外部には出さないこととしたい旨述べ、コウ部長は、サトウ・韓交渉で一致が得られるまで外部に発表しないことに同意した。

5. 最後にコウ部長より、ただ今の貴大臣の発言をうかがい、貴大臣が中国と同じようにこの会談を完成させる熱情をいただいていることを感じた。これは日本政府と日本人民の願望を反えいしていると考え、両国人民の願いを正しく反えいしてこそ3年半の交渉を終結させ、両国人民の願いに沿えるものと信ずる旨発言があり会談を了した。

(丁)

Number: (TA) R057275 5644
Primary: Asian Affairs Bureau Director-General

Sent: China, August 10, 1978, 03:30
Received: MOFA, August 10, 1978, 05:57

To: The Foreign Minister
From: Ambassador Sato

Treaty of Peace and Friendship between Japan and China Negotiations (2nd Ministerial Meeting)
No. 1608 Secret Top Urgent
(Limited Distribution)

The second meeting took place on the 9th, from 4:20 until 5:20 pm (with a break of 15 minutes). Following is a record of it. (Participants were the same as in the 1st meeting, following the break.)

1. At the start, Minister Huang Hua said: Following your statement this morning, Minister, I would like to state the Chinese side's attitude. He then said the following:

(1) The hegemony article of the treaty of peace and friendship, first of all, is binding on the Chinese and Japanese sides. The Chinese and Japanese sides have declared that they will not seek hegemony. That is the way it is, not only now but in the future, even if the economy develops. This attitude of China has become well known among the peoples of Asia and the world. Writing this into the treaty is an expression of China's determination not to seek hegemony.

(2) In Your Excellency the Foreign Minister's statement this morning, there was a reference to the attitude of the Southeast Asian countries. Certainly, the Southeast Asian countries are interested in the treaty negotiations and desire the treaty's conclusion. Their welcoming the treaty's conclusion is because of the real threat of Soviet socialist imperialism and, next, because they have doubts about Japan arising from historical circumstances. The Southeast Asian countries, the same as China, suffered imperialist invasion and losses. That is why they are wary of the Soviet Union and understand China's opposition to hegemonism. Regarding Japan, frankly speaking, they are naturally uneasy about a reappearance of Japanese militarism. That is why China has repeatedly said to all the Japanese friends that the conclusion of the treaty, including the anti-hegemony clause, is beneficial to Japan for improving its image. What we are saying conforms to reality, and we are saying it to Japan from a friendly position.

(3) Minister, you also touched on the viewpoint of the Japanese people. Your Excellency also spoke of opposition to hegemony taking root among the people since the issuing of the Joint Statement. We think that what Your Excellence is saying is that the principle of opposition to hegemony has been nurtured and observed broadly by the Japanese people. We consider the early conclusion of the treaty on the basis of the Joint Statement to be in conformity with the desires and interests of the peoples of the two countries. However, we also know that some in Japan oppose it. It is no wonder that, anywhere in the world, there are some opposed to what is good and right. However, it is only a handful of people who are opposed to this. Honestly speaking, they are not opposed to the conclusion of the treaty; it is Sino-Japanese friendship and the normalization of relations that they oppose. They do not represent the will of the peoples of the two countries. If Japan's statesmen represent these persons, then they will be in opposition to the will of the majority of the people. Yielding to a handful of persons would be betraying a large number of people.

(4) We know that Your Excellency the Foreign Minister has consistently taken a positive attitude since assuming his position. Your Excellency this morning again expressed enthusiasm for the treaty's conclusion. The Chinese side applauds Your Excellency's efforts on this. Fourteen meetings have already taken place between Sato and Han Nianlong. They have shown a certain progress. The two sides have put forth new drafts on opposition to hegemony, and the views of the two sides have gradually been growing closer. Here, Your Excellency the Foreign Minister and all the Japanese friends, in order to bring the talks of our two sides to a conclusion at a stroke, I agree in principle with the Japanese side's draft of August 7. That is to say, the proposal is to make Sentence 1 of the anti-hegemony article "The present Treaty shall not affect the position of either Contracting Party regarding its relations with third countries." This is again an expression of China's effort to conclude the treaty. Regarding the concrete expression of the provisions, there may be some minor issues remaining, but these are not difficult issues to settle. I would like to have Sato and Han Nianlong do the work on them. With the agreement of Your Excellency the Foreign Minister, together with Your Excellency the Foreign Minister I would like to wish success for the Sato Han Nianlong talks.

2. Minister Huang, by reason of necessity, exceeded the proposed break of 10 minutes. After a break of 15 minutes, the Minister spoke as follows:

(1) I have taken action consistently for the past 20 years on issues between Japan and China. Before the establishment of the Dietmen's League for Japan-China Friendship, I had run in the Japanese magazine Chuo Koron an article calling for ties between Japan and China. I said that unconditionally following the United States would lead to Japan's isolation in Asia. I was therefore brought up before the Liberal Democratic Party's Discipline Committee and strongly criticized. When, unexpectedly, I assumed the post of foreign minister, I felt that concluding a friendship treaty between Japan and China could never be accomplished if not by me. My consistent acts as foreign minister are well known in Japan. Since assuming this post, I have gone to various countries and taken action. During that time, everywhere I have taken action in aid of China and for the good of the struggle against hegemony. I really went to great lengths to make this visit to China. If we do not succeed at this time to conclude the treaty, then relations between Japan and China will hereafter stagnate for a considerable period of time. The ASEAN countries will then be unable to cooperate with Japan and China and contribute to peace and prosperity. For such reasons, I have come to China at this time in staking my purpose in life and destiny. I have come to stake my life as a Japanese politician on it. This desire of mine arises, as a Japanese politician, from loving your country, loving Japan even more, and loving Asia, as well as from reflecting on the war. I offer my profound gratitude for Your Excellency the Minister's recent statement having moved greatly in the direction of a settlement. I highly value Your Excellency the Minister and Your Excellency Han Nianlong for truly making a decision for the future of Japan, China, and Asia. If this treaty is settled, I will directly inform the Japanese people, inform them myself and on my own responsibility, that coming to this settlement is an expression of friendship on the part of the Chinese friends, of the Chinese people towards Japan and that the settlement is truly due to the decision made for the sake of peace in Asia. This is what I intend to convey directly to the Japanese friends. I express here approval for the recent proposal of Your Excellency the Minister and wish to have the draft hammered out between Han and Sato.

(2) In addition, I would like to say a bit more in regard to your view, Minister. First, quite frankly, I, as a friend, am happy about Japan receiving straightforward admonishments. I completely agree in regard to the Soviet threat. As for Southeast Asia's doubts and unease regarding Japan, regrettably, this is also something on which I have reflected. At the recent ASEAN Foreign Ministers' Meeting, too, I took particular note of this point. Henceforth, too, I would like to express, in good faith and in practice, to China and to Southeast Asia that we will seek Japan's course in the prosperity of China and Southeast Asia. I would like to express in practice henceforth

that Japanese militarism will not appear again.

(3) It is true that in Japan there are some opponents. However, in Japanese opinion polls, only close to 30 percent are in favor of unconditionally concluding the treaty. The rest, the people of the so-called cautious faction, know well that friendship between Japan and China is Asia's foundation. However, these people worry whether concluding the Japan-China treaty is really for the sake of the development of the two countries and the peace of Asia, or whether Japan will be dragged into China's strategy against the Soviet Union. With the conclusion of this friendship treaty, this unease will probably be swept away. I believe that when our two countries genuinely join hands and the countries of Southeast Asia, seeing this, fall in step, the struggle against hegemony will truly become effective. I firmly believe that the fight against hegemony is not only for the present situation but, extending forever into the future, the struggle against hegemony should be continued from various positions. We do not, caught up in what is before us, make an opponent of one country alone. Such a treaty between Japan and China would become a treaty in name only, not something for all time. On the treaty's conclusion, there will be various problems for Japan as well. Therefore, we will need China's help as well. However, your country, too, has various problems. In that case, I will visit China at any time. Also, I will ask you to come over to Japan from your country. My thinking is to cooperate and handle matters so as not to allow any scorn from another country.

3. Following that, the Minister stated that he wished for Sato and Han Nianlong to cooperate in their talks. The Ambassador stated: I would like to set the talks tomorrow for whatever time would be convenient. Minister Huang acknowledged this.

4. Further, the ambassador stated that, as this was an extremely important matter, he wished that it not be disclosed to the outside until an agreement was reached on a draft in the Sato-Han talks. Minister Huang agreed not to disclose it to the outside until a consensus was reached in the Sato-Han talks.

5. Finally, Minister Huang stated: Having just heard your statement, Minister, I felt that you are as eager as China is to bring these talks to completion. I think that this reflects the aspirations of the Government of Japan and the Japanese people. I believe that concluding three years of negotiations in correctly reflecting the desires of the peoples of the two countries will meet the desires of the peoples of the two countries. With that, he ended the meeting.

(End)